皆様どうぞ私をお忘れください。

―エリザベートが消した愛―

Characters
マーキス
エリザベートの通う教会の司祭。出生に秘密があるようで……
ミネルバ
エリザベートの実母。故人。
カトレア
ローズの母。ミネルバの死後、アーサーと再婚する。
アーサー
エリザベートの父。ミネルバ存命中からカトレアと関係を持つ。
エリザベート
ストレンジ伯爵家の令嬢。母の遺言により別邸で独り暮らす。
デマーリオ
エリザベートの幼いころからの婚約者。紳士的で優しいが……
ローズ
エリザベートの腹違いの妹。天真爛漫だが令嬢としては難がある。
エミリオ
エリザベートの義弟。ストレンジ伯爵家の跡継ぎとして引き取られる。

第一章

待合室には質素な椅子が二脚あって、エリザベートはその片方に座っていた。
姿勢を正す背中には、癖のない艶やかな白灰色の髪が流れるように落ちている。
ノックの後に扉が開けば、漆黒のキャソックを纏った若い司祭が現れた。
「お気持ちにお変わりはございませんか」
「はい。司祭様」
キャソックと同じ漆黒の髪。その下にある青い瞳を見つめてエリザベートは頷いた。
司祭はエリザベートの答えに視線を伏せた。だがそれもわずかな間で、彼は胸ポケットから小さな瓶を取り出した。
「戻られてからになさいますか？」
「いいえ、今ここで」
エリザベートはそこで、群青色の瞳を細めて笑みを浮かべ、
「貴方に見届けていただいてもよろしいでしょうか」そう尋ねた。
司祭が頷くと、エリザベートは笑みを深めた。

「綺麗な色ですのね」
手渡された小瓶を目の前に掲げれば、窓から差し込む午後の日射しに照らされて、琥珀色の液体が燦めいて見えた。
「貴女には何色に見えますか？」
「琥珀色ですわ」
「貴女のお心が澄んでいらっしゃるからでしょう」
「司祭様には何色に見えまして？」
祈りが捧げられた液体は、見る人によって色が変わるのだろうか。
司祭にはどんな色に見えているのだろう。
幼い頃から知っているのに、今も変わらず青年の姿に見える司祭からは、彼が何を考えているかはわからなかった。
それからエリザベートは、全ての事の始まりとなった人物を思い浮かべた。
滲み出すように胸の内から湧き上がるこの感情も、これが最後となる。
瞼を閉じて、エリザベートはシトリンの瞳を思い浮かべた。
――デマーリオ様。
最後の想いを捧げるように、心の中で名を呼んだ。思い出せる眩しい笑みは、今の彼より少しだけ幼いものだった。
瞼を開けばデマーリオの瞳と同じ色の液体は、変わらず琥珀色に耀いていた。

エリザベートは司祭を見ると、彼もまたエリザベートを見つめていた。
迷いならとうに振り切ったつもりでいたから、わずかに残る想いに心を動かされることはなかった。
エリザベートは小瓶の蓋を開けて、一気に呷った。
とろりと冷たい液体が喉を通る。ほんのり甘い味がして、遠い昔に吸った花の蜜に似ていると思った。
「具合は如何でしょうか」
「何も。何も変わりませんわ」
「お身体に変化はございませんか」
「いいえ。どこも」
エリザベートは司祭の青い瞳を見つめて微笑んだ。

馬車の前に立てば、すぐに御者が降りてきて扉を開けた。
中にはエリザベート付きの侍女が待っており、扉の前に立つ主人の姿に安堵した様子を見せた。
教会には待合室よりほかに部屋がなく、侍女はいつも馬車の中でエリザベートが戻るのを待っていた。
「ごめんなさい、ソフィー。すっかり待たせてしまったわね」
いつになく戻りの遅かったエリザベートを、彼女はきっと心配していただろう。

馬車のステップを上がるのに、御者より先に司祭が手を貸してくれた。
彼はエリザベートを案じてか、帰りの馬車まで見送りに来ていた。
「ありがとうございます」
司祭から手を貸してもらうのは久しぶりで、幼かった頃のことを思い出した。
扉が閉まるその前に、エリザベートは司祭に向かって声をかけた。
「また祈りを捧げに参ります」
「お待ちしております。貴女に神の御加護があらんことを」
司祭の言葉を最後に扉が閉まり、エリザベートを乗せて馬車が走り出す。
窓から見える風景は、一刻前と少しも変わっていなかった。
何も変化はなかった。
あのシトリンの瞳を思い浮かべても、懐かしいという気持ちのほかは何も湧いてこなかった。
――思い出になったのだわ。
神の加護が確かにあったのがわかって、エリザベートは嬉しくなった。
何も変わったわけではないのに、ただエリザベートが心を一つ手放して、その分、身体が軽くなった、そんなささやかな変化だった。

馬車の窓から門扉が見えて、ほどなくして屋敷の敷地へ入っていく。
正面に本邸が見えてくると、馬車はそちらへ向かって大きく回り込んだ。

本邸の玄関が見える少し手前で馬車は緩やかに速度を落として、そのまま馬が止められた。
本邸に隣接する小さな別邸、離れの邸がエリザベートの住まいである。
馬車を降りれば老齢の執事に出迎えられた。
「ロバート。ただいま帰りました」
「お帰りなさいませ、お嬢様」
離れの邸にも本邸とは別に専任の使用人がいる。父は、執事や侍女頭をはじめとするひと通りの使用人をここにも置いてくれた。
それはエリザベートが離れの邸へと移るときに、幼い彼女に不自由がないようにと配慮してのことだった。
ロバートは、元は本邸で長く執事として勤めていたのを、こちらへ一緒に移ってきた。エリザベートの母が信頼を寄せていた人物である。
ロバートがここでの執事を、ほかには侍女頭が離れの邸での細かなことを取り纏めている。
彼らの大半が老齢に差しかかっているのは、元はエリザベートの母に仕えていた使用人たちだからだろう。
エリザベート付きの侍女であるソフィーが最も若く、改めて聞いたことはないけれど、エリザベートより十歳ほどは年上かと思われた。
母に仕えた使用人たちに囲まれて、時が止まったような離れの邸で、エリザベートは一人、家族と離れて暮らしている。

自室に戻ってソフィーが下がると辺りはしんと静まって、窓の外から小鳥の囀(さえず)りが心地よく耳に届いた。
「胸が静かだわ」
独(ひと)りきりになって気がついたのは、胸を騒がせていたざわめきが綺麗に消えていることだった。

第二章

デマーリオと初めて会った日のことを、エリザベートは今も鮮明に憶えている。
デマーリオ・フォックス・シェルバーン。
エリザベートと同い年の彼はシェルバーン侯爵家の嫡男で、エリザベートの婚約者である。
鮮やかな金の髪にシトリンの瞳を持つデマーリオは、エリザベートには眩しく輝いて見えた。
デマーリオは、初めて会った十年前のあの日から、エリザベートの心を照らす光だった。
同時に、憂いをもたらす影でもあった。
エリザベートはそんなデマーリオに惹かれながら、彼の言動のひとつひとつに心を揺らした。
デマーリオとの婚約が結ばれた日は、母が最後の願いを打ち明けた日であった。
思えばあの日が、デマーリオとエリザベートの未来を運命づけたのだろう。

季節は早春で、エリザベートの誕生日を翌月に控えた八歳の終わりの頃だった。
「夫人、流石にそれは可哀想ではないか。エリザベートは独りになってしまう」
デマーリオの父であるシェルバーン侯爵の言葉に、エリザベートの母、ミネルバは答えた。
「仰る通りでございます、閣下。ですが、エリザベートの将来を考えたときに、私にはこれが一番良いと思えたのです。夫も後になれば、きっと同じことを思うでしょう」
ストレンジ伯爵家の応接室には、この日、二組の貴族が集っていた。
エリザベートは、侯爵家の一人息子で嫡男のデマーリオとの婚約を結ぶ、その顔合わせの席にいた。
エリザベート・フィンチ・ストレンジは、ストレンジ伯爵家の子女である。
エリザベートの母は、決して癒えることのない病を得て、このころには床に臥せる日が多くなっていた。そんな母を気遣って、両家の会合はストレンジ伯爵邸で行われた。
応接室にはデマーリオの両親である侯爵夫妻と、エリザベートの両親、そして婚約を交わすデマーリオとエリザベートが対面していた。
「伯爵、君はそれで良いのだな」
「私は、その……」
侯爵に問われても、父は言い淀んではっきりと答えない。
「閣下もご存じのことと思いますが、夫にはこの後、迎え入れる女性がおります。エリザベートと同じ歳の娘もおります」
背筋を伸ばした母の姿は、癒えない病に侵されているようには見えなかった。
髪を結い上げた細く白い項も、削げてしまった頬さえも、先細る命が最後の輝きを放つように美しく見えた。
エリザベートはもう、母の命がそれほど長くはないとわかっていた。

母との別れが近いことを予感して、言いようのない恐れと不安と哀しみを抱いていた。
この婚約は、死を前にした母の願いを叶えて、エリザベートのために結ばれる。
「私は夫に二つのお願いをいたしました。とても我儘なお願いですわ。ですが夫はそのどちらも受け入れてくれました」
母はそう言って、父を見た。父は俯いたまま、握り締めた両手の拳を見つめていた。
母は侯爵へと向き直ると、続きを話しはじめた。
「私の願いとは、エリザベートを後継から降ろして他家へ嫁がせることです。そしてもう一つ、夫が迎える家族とは住まいを別にしてほしいと願いました。夫は、長く別宅に置いた家族を本邸に迎えることを望んでおります。そうであれば、エリザベートを離れの邸に移してほしいと。ご覧の通り、離れの邸はこの本邸のすぐ隣ですから、遠く離れるわけではございません」
母の言葉通り侯爵夫妻はこのときすでに、父には長い関係の妾がおり、彼女との間にも子がいることを知っていた。
伯爵家の長子であるエリザベートは、本来であれば家を継ぐ身であった。
だが父は母の願いに応えて、つい先ごろ、遠戚の子爵家からエミリオという名の少年を養子に迎えていた。
エリザベートは他家へ嫁ぐ身となって、デマーリオとの婚約が結ばれることとなったのである。
侯爵夫妻にしても、母が、一人残していかねばならないエリザベートを案ずる気持ちは、子を持つ親として理解できるようだった。

「当家にはすでにエミリオがおります。遠戚に当たる傘下貴族の末子ですが、賢く優しい子ですわ。エリザベートに代わって当家を支えてくれるでしょう」
「私は……私は、ミネルバ、君を、エリザベートを愛していた」
父は苦しげな様子で言った。
「私もですわ、旦那様。貴方のことを愛しておりました」
「では、なぜエリザベートを離れの邸になど。私はこの子の父親だ。エリザベートと彼女たちを分け隔てるようなことはしない」
妾ともう一人の娘を「彼女たち」と言ったあとに、父はそれが失言であったというように母から顔を逸らした。
「旦那様、だからこそですわ。貴方が私たちとは別に愛さずにはいられなかったお二人です。長い間大切になさっておられた方々をお迎えになりたいお気持ちはわかります」
母はそこで、ひとつ息を整えて、次の言葉を続けた。
「私はもう貴方のおそばにいられない。貴族の当主に夫人は必要ですもの、後添えをお迎えになることは理解しております。私が案じておりますのはそこではないのです。貴方はきっと、エリザベートとお二人の間になって、どちらにも良かれとするうちに、いつか愛情を偏らせてしまうでしょう。私はその姿をエリザベートの目に映したくはないのです」
「ミネルバ、貴女のその気持ちなら私にもよくわかるわ。ここまで心を決めるのに貴女がどれほど悩んだか。子を持つ母として妻として、耐えがたいことだったと思うわ」

ハンカチを片手に母に同情したのは、デマーリオの母である侯爵夫人だった。彼女は母とは親しい間柄であった。
父は額に汗を滲ませ黙り込んだ。
両親に挟まれるように座りながら、エリザベートはいたたまれない気持ちになっていた。
自分の存在が両親を悩ませている。そんな気持ちになってしまってエリザベートは俯いた。
「ごめんなさい、エリザベート。貴女にこんなことを聞かせてしまうなんて」
そう言って、母はエリザベートを抱き寄せた。
両親はきっと、この日まで何度も話し合っていたのだろう。それがこんな婚約の場になって、言い合うような姿を見せてしまったことを、母は悔やむようだった。
エリザベートの白灰色の髪と群青の瞳は父譲りのものである。だが面立ちは母によく似て、そんな母娘が抱き合う姿に侯爵夫人は再び涙を零した。
そこで侯爵が、エリザベートを気遣うように声音を柔らかくして尋ねた。
「エリザベート。君は私たちの娘も同じだ。何も心配いらないから、正直な気持ちを言ってごらん。君はどうしたい？」
大人たちの瞳がエリザベートに向けられて、その中にはデマーリオのシトリンのような瞳もあった。
エリザベートは母の病も、父に大切にしているもう一つの家族がいることも、母の死が近くなってからはじめて知った。

母は、エリザベートともうすぐお別れしなければならないことを、泣きじゃくるエリザベートを抱き締めながら打ち明けた。
幼い娘に聞かせることに、言葉を選び時間をかけて話してくれた。
もうすぐエミリオを迎えること、エリザベートには婚約者ができて彼の家に嫁ぐこと、今は別宅にいる父のもう一つの家族を迎え入れることを、エリザベートは母の胸に顔を埋めて、涙でドレスを濡らしながら聞いていた。
途中で堪らなくなってしまって、母の背中に腕を回してぎゅっとしがみついた。お願いだからどこにも行かないでほしいと泣いたのである。
思えば父は、週のうちの幾日かを不在にしていた。
それが仕事のためだと思っていたから、父に母とは別に愛する女性がいて、半年違いで生まれた異母妹がいたことを、すぐさま呑み込めるほど大人になってはいなかった。
愛人や妾という存在が貴族にままあることを薄ら知ってはいても、母との婚姻から一年も経たないうちに愛人を得た父のことを理解するにはまだ幼かった。
エリザベートの幸せが母の最後の願いなのだとしたら、
「私はお母様のお気持ちの通りにいたします」
格上の侯爵に向かい、精いっぱいの言葉で答えた。
侯爵は、エリザベートに穏やかな笑みを見せて頷いた。
「君の気持ちはわかった。辛いことを言わせたね。そうだデマーリオ」

そこで侯爵は、神妙な面持ちで隣に座る息子を呼んだ。
「はい、父上」
「今日からエリザベートはお前の婚約者だ。大切にするんだぞ」
それはまるで、こんな願いを残してまで娘の将来を憂いている母を、安堵させようとする言葉に思えた。
「デマーリオ様、娘を、エリザベートをよろしくお頼みいたします」
母はデマーリオにそう言って頭を下げた。
デマーリオは、そんな母に見惚れたように、ぼおっとなって言葉を返せずにいた。
もしも彼がこの時に「諾」と答えていたのなら、その言葉はデマーリオの心を繋ぎとめる楔となってくれたのだろうか。
それはずっと後になって、エリザベートが思い返したことだった。
「さて、私たちはもう少し話がある。エリザベート、良ければデマーリオに庭園を案内してくれないか」
侯爵の言葉に、侍女のソフィーがエリザベートのそばについて、彼女に促されるようにしてエリザベートとデマーリオは応接室を出た。ソフィーはこのころからエリザベート付きの侍女だった。
「君のお母上はなんだか不思議な人だね」
エリザベートは、出会ったばかりの婚約者を前にして緊張していた。
気の利いた会話らしい会話もできぬまま、二人で庭園の小径を歩いていると、デマーリオは母について口にした。
「不思議？」
「うん。なんでも見えているみたいだ。なんというか、嘘もわかってしまうみたいな」
デマーリオの言ったことは、その通りに思えた。
母はエリザベートが知らない父のことを知っていたし、父の「大切にしている二人」のこともわかっていた。
なんでも見えて嘘もわかってしまう母に、デマーリオは嘘でもエリザベートを大切にすると答えることができなかったのだろうか。
エリザベートはまだ幼くて、何より緊張していた。
大人たちの話し合いの邪魔にならぬよう庭園を歩かされているが、季節はようやく春の兆しが見えはじめたころで、頬に触れる風は冷たかった。
だがエリザベートは、それすら気にする余裕はなかった。
デマーリオが話すことにひたすら耳を傾けていた。
早春の日射しにデマーリオの金色の髪がキラキラと透けて見えた。
シトリンの瞳を初めて見たから、こちらに向けられる眼差しにエリザベートは思わず見入ってしまった。まるで宝石のようなお方だわ。そんなふうに思った。
婚約とは結婚の約束なのだと母から教えてもらった。
エリザベートは今日、目の前の少年と結婚の約束をしたことになる。

それはエリザベートの心を不思議な温かさで満たしてくれた。

「姉上」

「エミリオ」

侯爵一家を見送ると、父と母はまだ話があるのか執務室へ入っていった。

エリザベートは自室に戻ろうと、玄関ホールから続く大階段を二階に上がったところで、手摺りの陰に立っているエミリオから声をかけられた。

不安げな顔を浮かべる小さなエミリオに、エリザベートは歩み寄った。

エミリオは、つい先ごろ養子に迎えた少年である。

母が侯爵夫妻に話したのは彼のことで、生家は傘下貴族のマグレイブ子爵家である。

明るい亜麻色の髪に榛色の瞳。

大地の色を纏う二つ年下の少年は、朗らかで素直な気質をしており、エリザベートはこの少年とすぐに馴染んだ。

エミリオが不安げな顔をしてエリザベートを見上げた。

「どうしたの？　淋しかったの？」

兄姉が多い家に育ったエミリオは、慣れない格上貴族の暮らしに生家を思い出すのだろう。

エリザベートにも、その淋しさがわかった。

エミリオの小さな手を握れば、彼は恥ずかしそうに笑みを浮かべた。

「エミリオ、本を読んであげる。昔話がよい？　冒険のほうが好き？　小人の島の旅行記もあるし、豆の木に登って雲の上に行くお話もあるのよ」

エミリオは、昔話も童話もあまり知らないようだった。子沢山の子爵家には経済的な余裕がなかったらしく、子女らには貴族としての最低限の教育以上は与えられずにいたようだ。

初めて入ったエリザベートの部屋で、本をこんなにたくさん見たことがないと言って、エミリオは本棚を見上げて目を輝かせた。

絵本や玩具がなくても兄姉たちが一緒だったから、遊ぶことには不自由しなかったのだと聞いて、エリザベートは微かな憧れを感じたのである。

母を気遣いながら、もう一つの家族の元へ通う父に、淋しさと諦めを募らせていたエリザベートにとって、母とエミリオと過ごした短い日々は、穏やかな家族の思い出となって残った。

その年の冬に、母はエリザベートを残して儚くなった。

それから半年後に父がもう一つの家族を連れてくるまで、エリザベートはエミリオと互いの淋しさを慰めるように、幼い心を寄せ合って暮らしていた。

母の喪が明けると、エリザベートが十歳の誕生日を迎えたばかりの春の盛りに、父は新たな夫人と娘を迎え入れた。

それはデマーリオとの婚約の席で母が言った通り、父が大切にしてきた家族だった。

エリザベートと同い年の異母妹に会ったのも、その日が初めてのことだった。

「エリザベート。この子がお前の妹だよ。ローズという名だ。仲良くするんだよ」
エリザベートに紹介しながら、父は目を細めてローズを見下ろし、義母(ははぎ)譲りの柔らかなそうな金髪の頭を撫でた。
「こんにちは。お姉さま」
父に紹介されて、ローズは愛らしく笑った。
突然現れた異母妹に困惑したが、青い目を細めて無邪気な笑みを向けるローズを、エリザベートは可愛いと思った。
義母とローズが本邸に住むのに合わせて、エリザベートはすでに離れの邸に移っていた。
二人を迎え入れてからの父は、とても幸せそうだった。
それから間もなくすると、エリザベートは母が危惧(きぐ)したことを感じはじめるようになる。
母が臥せっていたころは沈んだように見えた父は、もう母のことを忘れてしまったのかもしれない。
父は母のこともエリザベートのことも愛していると言ったけれど、その姿は少しずつ、エリザベートに見えない隔たりを感じさせていく。
離れの邸の二階にある自室の窓からは、本邸が見えていた。
エミリオの部屋は二階の角部屋で、自室の窓から顔を出せばすぐにわかった。
夜にエミリオの部屋に灯りがつけば、あそこにエミリオがいるのだと思った。
あの子はどうしているのだろう、淋しがってはいないだろうかと考えたときに、自分こそ一人なのだと思い出した。
「エミリオは、いつか私のことを忘れてしまうのかしら」
「そんなことはございません。エミリオ坊ちゃんはお優しいですから、今ごろきっとお嬢様のことを思い出されておいででしょう」
エリザベートの呟(つぶや)きには、ソフィーが答えてくれるのだった。

■

母との思い出は、どれも明るく穏やかなものだった。それが今もエリザベートの心を温める。
生前の母は時折、エリザベートを連れて教会を訪れた。
そこでは決まって、礼拝堂で長い祈りを捧げていた。
教会には、マーキスという名の青年司祭がいた。
漆黒のキャソックに漆黒の髪。濃く鮮やかな青い瞳。
マーキスのほかには使用人らしい老齢の女性を見かけるくらいで、聖職者が妻帯を許されるこの国で、彼はまだ独身のようだった。
背の高いマーキスは、エリザベートが挨拶をすると、目線を合わせて挨拶を返してくれた。
待合室の椅子は座高が高く、エリザベートが椅子に腰かけるときには、彼が手を貸してくれるのだった。

母が他界してからは、エリザベートは執事のロバートと一緒に教会を訪ねるようになった。母に代わって月に一度、教会への寄進を行っている。
「司祭様、ご機嫌よう」
母の口ぶりをまねて挨拶すれば、マーキスは目を細めて眉を下げた。
「エリザベート様。このたびもご寄進をありがとうございます。ひと月の間、お変わりはございませんでしたか？」
マーキスは最初に母へのお悔やみの言葉を述べてからは、もうそのことには触れなかった。
哀しいことを何度も思い出させないようにと、気遣っていたのだろう。
その日マーキスは、帰宅するエリザベートを馬車まで送ってくれた。
エリザベートが馬車に乗り込むと、扉が閉まる前に彼は言った。
「冥府とは哀しいばかりの場所ではないのだと思います。あちらの世界にも、きっと楽しいと笑えることがあるでしょう」
「あちらの世界でも笑えることが？」
「ええ。例えばエリザベート様がなにか面白いことがあって、それでお笑いになったなら、ミネルバ様も貴女と一緒にお笑いになるのでしょう」
マーキスの言葉の真偽はわからずとも、司祭が言うのだから間違いないと思った。
「ロバートもそう思う？」
帰りの馬車の中でそう尋ねれば、

「ええ、ミネルバ様はたいへんな笑い上戸でいらっしゃいましたから、今もお嬢様のことをご覧になって笑っていらっしゃると思いますよ」と言ってくれた。

第三章

「お義母様、ご機嫌よう。お父様がお呼びと伺いました」
「あら、そう。旦那様なら執務室にいらっしゃるわ」
エリザベートが挨拶をすれば、義母はおっとりと答えた。
義母とローズはよく似た母娘で、柔らかそうな淡い金色の髪もほんのり垂れた目元も、彼女たちを甘く儚げに見せていた。
父に所用で呼ばれて本邸を訪ねたのは、エリザベートが離れの邸に移ってからはこの日が初めてのことだった。
ついこの前まで暮らしていた本邸は、漂う空気がすっかり変わって、まるで知らない家のように感じられた。
ふと見上げた階段の上、手摺りの陰にエミリオの姿が見えた。
エミリオが胸元で小さく手を振っていた。エリザベートも同じように小さく手を振り返した。
それにエミリオが笑ってくれて、エリザベートは嬉しくなった。
「お姉さま」
エリザベートを呼んだのはローズだった。

青い瞳を細めて、はにかむ笑みが可愛らしい。
エリザベートも挨拶しようと口を開いたところで、義母が先に話しだした。
「駄目よ、ローズ。お姉様はお父様に呼ばれているのよ。お邪魔をしてはいけないわ」
義母はそう言ってやんわり窘めると、「じゃあ、私たちはこれで」とローズの手を取りティールームのほうへ向かっていった。
二階の手摺りのところにはまだエミリオがいて、こちらに来たそうな顔をしていた。
声をかけようとしたときに、
「エリザベートお嬢様、こちらへ」
父の侍従に促されて、それきりになってしまった。
その後もエリザベートは幾度か本邸を訪ねたが、もうすぐ晩餐の時間だからと食事に誘われることも、お茶はどうかとティールームに招かれることもなかった。
そういうときには義母は大抵、「お邪魔をしてはいけないわ」とか「お姉様はお忙しいのよ」と言って、おっとりとした笑みを浮かべるのだった。
生さぬ仲ではあるが、義母はエリザベートに冷たく接するわけではない。だからといって親身になるということもなかった。
顔を合わせれば笑みを浮かべて挨拶をするがそれだけで、エリザベートに対しては関心がないように見えた。
「まあ、お嬢様、もうお戻りで？」

離れの邸に戻ったエリザベートに侍女頭が驚いたのは、本邸でお茶に誘われるとばかり思っていたからだろう。
「さあさあ、お嬢様。午後のお茶にいたしましょう。料理長がプディングを蒸しておりますよ。ほら」
そう言って侍女頭はすんすんと鼻を鳴らしてみせた。
「本当だわ。いい匂いがする」
確かにここまで甘い香りが漂っている。
侍女頭は、それからエリザベートにお茶の用意をしてくれた。
晩餐のデザートにと調理していただろうプディングは、まだ粗熱が取り切れておらず、口に入れるとほんのり温かく感じた。ホイップしたクリームがいつもより多めに盛られて、それだけでエリザベートは嬉しかった。
エリザベートが、母に似たユーモアや気さくな会話の楽しみ方を忘れないでいられたのは、こんな使用人たちがそばにいてくれたからだろう。

■

月に一度、デマーリオとの茶会がある。
それは婚約したときに両家で定めたことで、エリザベートはその日を何より心待ちにしていた。

二人の茶会は隔月で招くかたちで、侯爵家と伯爵家とで交互に設けられていた。
侯爵家を訪問する際には緊張を覚えたが、侯爵夫妻はいつもエリザベートを温かく迎え入れてくれた。
デマーリオは、高位貴族の嫡男らしく快活で社交的な少年だった。
友人も多く、勉学にも剣術の鍛錬にも励んでおり、朗らかな気質に加えて所作には品があった。
エリザベートはそんなデマーリオに、この頃にはすでに、はっきりと自覚できる恋心を抱いていた。
彼が語る話題はエリザベートの知らない少年らしいことばかりだったが、エリザベートはそれもすべて楽しかった。
デマーリオの言葉ならひとつだって聞き漏らしたくないと、シトリンの瞳を見つめて聞き入った。
その日は、伯爵家での茶会だった。
会合の場所は本邸ではなく、エリザベートが住まう離れの邸である。
デマーリオと婚約して一年が経ち、季節は初夏を迎えていた。
朝から気持ちの良い青空が広がって、庭園には夏花(なつばな)が咲きはじめている。
屋外を好むデマーリオのために、エリザベートは庭のガゼボにお茶を用意していた。
ガゼボでの茶会を気に入ってか、デマーリオはすぐに楽しげに話しはじめた。
護衛と剣の稽古をして一度だけ彼を打ち負かしたとか、少年たちで牧場(まきば)に行った話だとか、このひと月の出来事を語っていたデマーリオが、そこでふと視線を止めた。

「あの子が？」
本邸と離れの邸の間は、共有する小径が通っているだけで、はっきりとした仕切りがない。
だから本邸の庭の端からこちらを窺うローズの姿に、デマーリオはすぐに気がついた。
「え？」
その姿にエリザベートは驚いた。
どうしてローズは、一人であんなところにいるのだろう。
ローズが伯爵家に迎えられてひと月ほどが経っていた。
慣れない庭で迷ってしまったのだろうか。侍女は彼女を一人にして一体どこにいるのだろう。
貴族令嬢の教育を受けたエリザベートは、ローズが異母姉のお茶会を覗き見ているとは思いもしないことだった。
「お嬢様、少々おそばを離れます」
後ろに控えていたソフィーが、足早にローズのほうへ向かっていった。
「あの子だろう？　前に聞いた」
「はい。ローズと申します」
「ふうん」
好奇心旺盛なデマーリオがローズに興味を抱いたようで、エリザベートはそこに微かな違和感を覚えた。
喩えるなら、それはさざ波のようなもので、エリザベートの胸をさわさわと騒がせた。

だがそれは、次の瞬間に波を立てた。
「こちらに呼んだら？」
「お坊ちゃま」
デマーリオの提案は、侯爵家の侍女がすぐに諫めた。
「わかってるよ」
デマーリオはそう言ったが、その瞳には確かな好奇心が浮かんでいた。

「まあ、少々のことは大目に見てやりなさい。姉の婚約者を見てみたかったんだろう」
晩餐の席で、父はローズの行為に寛容を示した。
離れの邸にひとり住まうエリザベートのために、父は週のうち幾日かは晩餐をともにしてくれる。
本邸での晩餐に呼ばれることがないからといって、父はエリザベートのことをすっかり忘れてしまってはいなかった。
「あの子は長いこと市井に暮らしていたから、貴族のマナーに慣れていないのだよ」
そうだろうとエリザベートも思った。だがローズは庶子であっても、父は伯爵家の当主で義母も子爵家の令嬢だったというから、相応の教育は受けていただろう。
「エリザベート。あの子はお前の妹だ。デマーリオ殿ともいずれ義兄妹となる。あまり厳しくしては可哀想だ、仲良くしてやりなさい」
父の言葉に、エリザベートはここでも微かな違和感を覚えた。

それはとても朧げなもので、静かに心の底に沈んでいった。

結局その次の茶会でも、ローズは庭園の端からこちらを見ていた。
ソフィーも晩餐での父の言葉を聞いており、前のように彼女を帰すことはできなかった。
エリザベートは、本邸の侍女たちがローズを連れて帰るだろうと思っていたが、茶会が終わるまで誰も現れることはなかった。
本邸の暮らしにまだ馴染めていないだろうローズには、使用人たちも遠慮して諌めるようなことを言えないのだと思った。
デマーリオと邸に戻るときになって、本邸の侍女が来てローズを連れ帰った。
その背中を見ていたのを、ふと本邸のほうへと視線を移した瞬間に、エリザベートは身体の自由を失って縫い留められたように動けなくなった。
視線の先、本邸の窓辺に義母がいた。
義母は庭に面した窓からこちらを見ていた。
遠目であってもはっきりわかった。義母はいつものおっとりとした表情をすっかりなくして、まるで感情の見えない顔をしていた。
温度のない眼差しに縛られたように、エリザベートは動くことができなかった。
「どうしたんだ？　エリザベート」
デマーリオの声にはっとして、そこで身体の自由を取り戻した。

あれは一体、なんだったのだろう。
義母はただ、窓から外の景色を見ていたのだ。そう思えばなんでもないことなのに、胸を激しく打つ鼓動はすぐには静まってくれなかった。
「顔が青いよ、寒いの？」
季節は夏の終わりを迎えていたが、日射しが強く暑い日だった。それでも日陰のガゼボは冷えるのだろうと、デマーリオは心配したようだった。
「大丈夫です、デマーリオ様」
そう言ってエリザベートが笑みを見せれば、デマーリオはそれ以上を気にかけることはなかった。

あんな射るような視線を、これまで向けられたことはなかった。
だから、次にデマーリオを迎える茶会で、エリザベートは少しばかり迷っていた。
秋は深まりその日は晴天で、紅葉する庭園の眺めが美しかった。
陽光が木々を眩しく照らして、こんな日には、デマーリオならきっと庭を散策しようと言うだろう。
窓辺に立つ義母の姿が思い出されて気にはなったが、デマーリオに楽しんでほしい気持ちが先になった。それで結局、庭のガゼボに招くことにした。
デマーリオを案内しながら庭園の端に目をやったが、誰の姿もなかった。本邸のあの窓は、ここからはよく見えなかった。

考えすぎだったのかもしれない。
デマーリオは楽しそうだった。それだけで彼をガゼボに招いて良かったと思った。
乾いた空気に枯れ葉の匂いが混じり、デマーリオは落ち葉が風に吹かれて舞いあがるのを面白いと言った。
それから、侯爵から新しく買ってもらったというお気に入りの剣の話をしてくれた。
庭園を散策しようとなって、二人並んで小径を歩いていた、そのときだった。
「あの子、またいるね」
デマーリオの言葉に、エリザベートは彼の視線の先を辿った。
本邸の庭の端に、ローズが風にワンピースの裾を靡(なび)かせて、こちらに向かって立っていた。
淡いレモン色のワンピースがデマーリオのシトリンの瞳と重なるようで、エリザベートは思わず目を瞑(つぶ)った。
「こちらにおいでよ」
デマーリオは、子供同士の集まりで気後れして輪に入れない子を呼ぶように、ローズに手招きをした。
「お坊ちゃま、なりません」
そう諌めたのはデマーリオの侍女で、エリザベートばかりでなく、その場にいた侯爵家の護衛もソフィーもデマーリオの行動に驚いた。
デマーリオは侍女に向かってちょっと肩をあげてみせた。それからエリザベートに向き直って

言った。
「だって可哀想じゃないか。あの子は君の異母妹だろう？　それなら僕にも関係あるよ」
可哀想とは、ローズのための言葉に思えた。
デマーリオに呼ばれたローズは、駆け足になってこちらへやってくる。
その向こうに本邸の侍女の姿が見えて、ローズが来たのは偶然ではないのだと思った。
「こんにちは」
ローズはデマーリオに呼ばれて嬉しかったのだろう。はにかみながら笑みを浮かべて挨拶した。
それから、はっとしたようにエリザベートにも「こんにちは」と言った。
「私はシェルバーン侯爵家のデマーリオという。君がエリザベートの妹のローズだね？」
デマーリオは自分のことを「私」と言った。エリザベートには僕と言っていたから、どうやらローズの前で背伸びをしているようだった。
名乗る前に自分の名前を言い当てられて、ローズは満面の笑みを浮かべた。
言葉も所作も令嬢のそれに及ばない。なのにローズは可憐だった。真っ白な歯を見せた彼女の笑みに、デマーリオが見惚れたように思えた。
エリザベートの群青色の瞳とは違う、ローズの明るい青い瞳が、秋の日射しに眩しそうに細められた。
「君は街のことに詳しいんだろう？　だったらあの店を知ってるかな？」
デマーリオは、エリザベートが知らない菓子店だろう店の名を挙げた。

「ううん、よくわからないわ」
ローズが困ったようにはにかんで、それにデマーリオが「なんだそうか」と言う。
その後も二人は短い会話を交わして、それはどれも他愛のない子供同士の話だった。
だがデマーリオは、最後まで剣や馬乗りといった男の子たちとの遊びのことではなくて、王都の百貨店や菓子店などの話をした。
どれも女の子の好みそうなことで、デマーリオがローズのために話題を選んで話すのを、エリザベートは彼の隣で聞いていた。
「お坊ちゃま、そろそろお暇のお時間です」
デマーリオに辞去を促したのは侯爵家の侍女だった。
エリザベートはこの日、婚約者が帰ることに初めてほっとした。
「エリザベート、また来月会おう。母上が君の好きな菓子を用意するよ」
屈託のない笑みを向けてエリザベートに言う姿は、いつもと変わらないエリザベートのよく知るデマーリオだった。
帰りの見送りに、ローズがついてくることはなかった。
邸に戻ろうとデマーリオが手を差し伸べて、それにエリザベートが手を添えるのを、ローズはただじっと見ていた。

第四章

デマーリオと婚約を結んでから年月が過ぎて、二人は互いに十五歳になっていた。
「デマーリオが失礼してしまったようね。貴女には不快な思いをさせてしまったわ」
シェルバーン侯爵家の庭園のガゼボで、侯爵夫人はそう言って眉を下げた。
夫人はふくふくとした小柄な女性で、柔らかな気品の漂う面立ちはデマーリオもよく似ている。
エリザベートは定期的に侯爵邸を訪れて夫人から教えを受けており、その後はいつもお茶の時間となっていた。
夫人の謝罪は、先日のエリザベートとの茶会で起きた出来事についてだった。デマーリオの侍従から報告を受けたのだろう。
「旦那様がお留守だと、気が緩んでしまうのかしら」
侯爵は領地と王都を行き来しており、今は領地にいて王都の邸を留守にしていた。
「私から注意をしておきました。今後は気をつけると思うの」
先日の茶会はストレンジ伯爵家で行われた。
爽やかな初秋の風が心地よいからと、デマーリオに誘われて離れの庭を散策していた。
彼はこのごろまた背が伸びて、エリザベートが見上げるほどになっていた。剣術の稽古に励む身

体は、上背ばかりでなく厚みも増している。
いつの間にか、エリザベートの前でも自分のことを「私」と言うようになり、側付きは去年には侍女から侍従に変わっていた。
金色の髪とシトリンの瞳は変わらず出会った頃のままで、こちらを気遣いながらエスコートする紳士のマナーも身につけている。
「父上が領地から戻ってきたら、カブ・ハンティングに連れていってもらうことになったんだ」
カブ・ハンティングとは子狐狩りのことで、本格的な狐狩りシーズンを前に、経験の浅い狩猟者のトレーニング代わりになっている。
「狐を狩ったら君に贈るよ。冬の襟巻に仕立てて」
きっと似合うだろうなと言って、デマーリオは悪戯(いたずら)っぽくエリザベートを覗き込んだ。
顔を寄せたデマーリオにエリザベートはすっかり照れて、思わず俯いてしまった。デマーリオは、そんなエリザベートを逃すまいとするように、尚もこちらを覗いてきた。
陽光にエリザベートの頬が染まる。デマーリオと二人で過ごす、穏やかな秋のひとときだった。
あの角(かど)のところで引き返せばよかった。そう思ったのは後になってからである。
庭園の角を曲がれば本邸との境目となる。
小径が通っているだけだから、そこにローズがいたとしても、誰も何も問うことはない。
「デマーリオ様、ご機嫌よう」
そう言ってローズはデマーリオに微笑んで、それからエリザベートにも笑みを向けた。

「君も散歩？」
「ええ。お天気が良いから」
ローズはそこで、デマーリオの右側に並ぶように歩み寄った。左側にはエリザベートをエスコートしていたから、デマーリオを真ん中にして三人は横並びになった。
「んっんっ」
デマーリオの侍従が小さく咳ばらいをしたのは、ローズがデマーリオの腕に手を掛けたからだった。
「少し歩くだけだよ」
デマーリオは、ちらりと侍従に向いて言った。
「ローズ、貴女、侍女は？」
「はぐれてしまったの。一緒に来たのだけれど」
エリザベートが尋ねると、ローズは何でもないというように答えた。
ローズはデマーリオの姿を見つけて、急いでこちらに来たのだろう。それで侍女を置き去りにしてしまったか、或(ある)いはそのまま見逃されたか。
義母が差配する本邸で、誰もローズを止めることはない。デマーリオもまた、屈託なく彼女を受け入れてしまう。
ほんの数日前の出来事を思い出していたエリザベートは、夫人の言葉に顔を上げた。

「それにしても、伯爵はまだそんな甘やかしをなさっておられるのね」
夫人は、ローズへの父の教育について言ったのだろう。
今の父の最愛は義母である。その義母によく似たローズへ向ける愛情は深く、父がローズに甘いのも今に始まったことではない。
夫人の話はそれからすぐに、どこかの茶会のことに移った。
朗らかな夫人の声を聞きながらエリザベートが思い浮かべたのは、視線を交わす二人の姿だった。
ほんの数秒、それくらいのことだった。
デマーリオを見つめるローズの瞳を、彼もまた見つめていた。
ローズが笑みを深めると、白く綺麗な歯が見えた。
破顔するローズを、デマーリオは何を思って見ていたのだろう。
まるで二人が心を寄せ合うようで、その瞬間に、エリザベートはひとり傍観者のように取り残された。

■

庭の木々がすっかり葉を落として、はあと吐いた息が白く辺りに滲んだ。
冬枯れの季節を迎えて、エリザベートは父に呼ばれて本邸に行く途中で歩みを緩めた。
ローズとデマーリオが見つめ合っていた小径には、誰の姿もなかった。

鮮やかな赤や黄色の落ち葉に彩られた二人の姿を思い出した瞬間に、エリザベートは自分が今もまだあそこでひとり傍観者のまま佇(たたず)んでいるようで、足早になって通りすぎた。
「姉上！」
「エミリオ」
玄関ホールに入ると、人懐っこい笑みを浮かべてエミリオが大階段から降りてきた。
エリザベートは階下にいて、エミリオが小走りで降りてくるのを待った。
「走っては危ないわ、エミリオ」
「姉上ほど頼りない足腰じゃありません」
「まあ。失礼ね」
「義父上(ちちうえ)に用事？」
「ええ、そうなの」
「僕も一緒に行こうかな」
「お小言を言われるのかもしれなくてよ。貴方も付き合ってくれるの？」
「姉上と一緒なら、たまにはいいかな」
義母とローズは出掛けているらしい。
エミリオはエリザベートを見つけると、大抵、彼のほうから声をかけてくれる。
エミリオが離れの邸に来ることはない。
エミリオばかりでなく、義母もローズも、父以外の家族がエリザベートを訪れることはない。

父が再婚してから間もないころだった。何かの用事でエリザベートは本邸へ呼ばれた。
そこで久しぶりに会えたエミリオから、思いもしないことを聞いたのだった。
『義母上に言われたんだ。ミネルバ様がそう義父上にお願いしたって。僕らは姉上に会いに行っちゃ駄目だって』
『そうじゃないわ、エミリオ。お母様はそんなことは言ってないわ。エミリオだってわかるでしょう？　お母様がそんなことを言うわけがないって』
エリザベートの言葉にエミリオは俯いてしまった。彼もそうだとわかっている。
だが養子のエミリオには遠慮がある。父に愛されている義母やローズに対してもそうだろう。
離れで暮らすエリザベートがどんなに否定をしても、彼にはどうすることもできない。
エリザベートは、これ以上言ってはエミリオを追い詰めるだけだと、そう思ったのである。
あれからエミリオとは、エリザベートが本邸を訪ねるときしか会えなくなった。
こんなふうにエミリオが声をかけてくれて、わずかな会話を交わすことが、彼とのささやかな交流となっている。
父の用事とは、来春に入学する学び舎についてだった。時期的に、多分そうだろうと予想をしていた。
だが父の言葉は、エリザベートが思いもしないことだった。
「ローズは貴族学園のほうに通いたいそうだ。お前は淑女学院に通うのが良いだろうと願書を用意していたのだ」

「私が淑女学院に？」
エリザベートは思わず聞き返した。
「何も問題なかろう。お前なら淑女学院の入学試験も難なく通るだろう。ローズも貴族学園へ入学するのを楽しみにしている」
貴族学園は貴族子女のための学び舎で、貴族の令息令嬢であれば入学に際して試験はない。
淑女学院も貴族学園と同様に王立の教育機関であるが、そこは令嬢だけの学舎であり入学に際して試験がある。
淑女学院への入学は狭き門と言われている。王族付きの女官や教育者には、淑女学院の出身者が多いことでも知られていた。
「ですが、お父様。貴族学園にはデマーリオ様が……」
「なんだ、お前も貴族学園に通いたかったのか？」
エリザベートは、デマーリオと同じ学び舎に通えるものと、当然のように思って心待ちにしていた。
「デマーリオ様も通うのですし、私もそちらに通うものだと思っておりました」
「お前が優秀なのは家庭教師からも聞いている。侯爵夫人にもお褒めの言葉を頂戴している。折角、成績優秀であるのだから、淑女学院で学ぶのが良いだろう」
父はエリザベートになにも確かめることなく、すでに準備を整えていた。
目の前には父が用意した願書があり、あとはエリザベートが署名をするばかりとなっている。

「私も貴族学園に通ってはいけないのですか？」
諦めきれず、エリザベートは父に尋ねた。
すると父はエリザベートを見つめて、どこか哀しいというような顔をした。
「ミネルバは、そう望まないだろうな」
「え？」
「カトレアとも話したんだが」
カトレアとは義母の名である。
「ローズとお前を同じ学園で学ばせるのを、ミネルバはきっと望まなかっただろうな。貴族学園に入学すればお前たちは同学年だ。二人が一緒になってわざわざ人の耳目を引かずともよかろう」
「私の気持ちも確かめずにですか？」
「エリザベート。聞き分けなさい。私たちはお前のために良かれと考えたのだ」
デマーリオと同じ学園に通える。当たり前と思っていたのが潰えたことに、エリザベートはすっかり落胆してしまった。
重い足取りで離れの邸へと戻り、玄関ホールに飾られた母の肖像画を見上げれば、その膝の上で幼いエリザベートがこちらを見ていた。母が最後に描かせた肖像画には、エリザベートも一緒に描かれている。
「お母様……」
額縁の中で、母はいつまでもエリザベートに温かな笑みを向けていた。

■

年が明けて淑女学院への入学が決まったころに、エリザベートに養子の話が持ち上がった。
それは今が初めてのことではなく、エリザベートには以前より、母方の祖父母と伯父から養子縁組が持ちかけられていた。
父方の祖父母はすでに鬼籍に入っており、エリザベートにとっての祖父母とは、この二人だけだった。
母の忘れ形見であるエリザベートを、祖父母も母の兄である伯父も案じてくれていた。
再び養子話が持ち上がったのは、デマーリオとローズが関係してのことだった。
それはエリザベートもあとになって知ったことだった。
とある茶会でデマーリオとローズが偶然、顔を合わせたらしく、そこでの二人の様子が小さな噂となっていた。
二人は親しげに会話を交わしていたが、そのうちデマーリオがローズをエスコートして庭を散策しはじめた。
それだけであれば、いずれ身内となるのだし多少の交流はあると思われただろう。
だが、このときの二人の様子があまりに睦まじく、なにやら距離も近かった。それが周囲の目を引いた。

茶会には義母も参加していたのだが、彼女はそんな二人にはなにも言うことはなかったという。
実のところ、ローズとデマーリオのそんな噂はこれまでもあったのだが、噂が祖父母たちの耳に入ったことで、いよいよエリザベートを引き取りたいと、そういう話になったらしい。
だが父は、養子縁組の申し出を断ったという。
エリザベートはそのことを、父に呼ばれた執務室で聞かされた。
エリザベートがなにかを知らされるのは、大抵、物事が決まった後のこととなる。
貴族令嬢とは大半が似たようなもので、父親の定めたことに従うしかない。
ただローズばかりはエリザベートの傍らで、彼女の希望を叶えられていた。
「養子などと、そんな話を承知できるわけがなかろう。お前は私の娘なんだぞ」
「……」
「ミネルバは、私にお前を託したんだ」
「お母様は……」
母はエリザベートの幸せを願っただけだった。父が迎える家族の中で孤立するだろうエリザベートのことを案じていた。
母があの日、エリザベートを離れに移すことを願わなければ、エリザベートは義家族と暮らしながら、今とは違う孤独を抱いていたのだろうか。
「エリザベート」
「……」

エリザベートは無言のまま俯いた。
「私たちに不服があるのか？　そんなに私たちが嫌なのか？」
父はきっと、養子縁組を断ったことでエリザベートが消沈したと思ったのだろう。それでエリザベートが父たちを厭忌（えんき）しているような言い方をした。
エリザベートは義母やローズに、父が言うほどの感情を抱いてはいなかった。
父からそんなふうに思われていたことにエリザベートのほうこそ驚いて、もうなにも言葉を返すことができなくなってしまった。

早春の庭園はようやく芽吹きの季節を迎えていた。
淑女学院への入学を翌月に控えて、その日の茶会はシェルバーン侯爵邸で行われた。
まだ風が冷たいからと、庭を眺められる応接室での会合だった。
「淑女学院に通うと聞いたが、それは本当なのか？」
「はい。父がそのように決めまして」
デマーリオは侯爵夫人から聞いたのだろう。夫人に招かれたお茶の席で、エリザベートは淑女学院に合格したことを報告していた。
デマーリオは冬の間、侯爵に連れられて狐狩りに夢中になっていたから、エリザベートが侯爵邸を訪問する際にも不在であることが多かった。今日、彼に会うのもひと月ぶりのことだった。
「てっきり、君も貴族学園に通うのだと思っていたよ」

エリザベートもそう思っていた。
「残念だな」
「え？」
「いや、君と一緒に通うものだとばかり思っていたから」
その言葉に、エリザベートの沈んだ心がふわりと浮上した。
「私も、」
「ん？」
「私も、そう思っておりました」
「そうか……」
デマーリオはそこでお茶をひと口含んだ。ただそれだけのことなのに、エリザベートはその姿に目を奪われた。
長い金色の睫毛が伏せられて、シトリンの瞳を覆っている。カップを持つ指先は、爪まで綺麗に整えられている。
久しぶりに会えた婚約者を、エリザベートは愛おしく思いながら見つめていた。
「君を、ほかの令息たちの目に触れさせずに済むと思えば、諦めもつくのかな」
淑女学院は当たり前だが令嬢ばかりの女学校である。デマーリオの独占めいた言葉に、エリザベートの胸が小さく跳ねた。
「あそこは寮があるんだろう？　君も入寮を？」

「いいえ。私は邸から通います」
そこでデマーリオは小さく息をついた。
なにを思っての溜め息なのか、デマーリオのそんな些細な仕草にも、いちいち心が揺れてしまう。
エリザベートはそこで、先日の出来事について話した。
「母の生家から養子の申し出を受けまして」
「そんな必要はないだろう。伯爵はそれを受けたのか？」
デマーリオの思いがけない否定に驚いた。
「いいえ、お断りしたと」
「そうか」
デマーリオが安堵したように見えて、養子話に後ろ髪を引かれていたエリザベートは、そこで迷いを手放した。
茶会が終わって、エリザベートを馬車まで送りながらデマーリオが言った。
「淑女学院に入学したら、君の暮らしぶりを教えてくれないか。文でよいから」
会おうと言ってはくださらないの？　思い切ってそう聞けたら、この胸のつかえは晴れるのだろうか。
デマーリオとローズの噂は、今もまだエリザベートの心に影を落としていた。

立ち読みサンプルはここまで

第五章

「淑女学院へのご入学、おめでとうございます」
「ありがとうございます、司祭様」
自分から願ったものではないと打ち明けたなら、司祭はなんと言うだろう。
彼ならきっと、喜ばしいとは言わないでくれるのだろう。
淑女学院へ入学して、エリザベートはこの日、教会を訪れていた。
漆黒のキャソックを纏うマーキスは、髪もまた濡れ羽のような黒髪である。濃く青い瞳まで、彼を聖職者らしく見せている。
年のころは二十歳をとうに過ぎているだろう。三十にはまだなっていないかもしれない。
神の僕であるからか、いつ会っても彼だけは同じ姿のまま変わらないように見えた。
「第五王女殿下もご一緒に入学されたそうで、もうお会いになられたのですか？」
「ええ。光栄なことに、同じ教室で学んでおります」
「そうですか。王女は聡明なお方であるとお聞きしております」
マーキスは、世間が語るようなことではなくて、アイリスを聡明と言った。
王国の第五王女であるアイリスは、孤独の王女である。

側妃腹の彼女は、第四王女リリーとは双子の姉妹として生まれた。
生後すぐに執り行われた神殿での儀式で、二人は宣託を受けたという。
陰と陽の双子の姉妹。リリーが表に出るならアイリスは影のように後ろに控える。
混じり気のない金の髪もロイヤルブルーの瞳も、ほかの異母兄姉たちと同じである。
だがアイリスは、生まれたばかりで姉とは明確に分けられて育った。
王太子を筆頭に、正妃、側妃それぞれから生まれた王子王女らが並ぶときにも、アイリスは彼らの最後尾にそっと並び立つ。
彼女の場合も、リリーは貴族学園に、アイリスは淑女学院にと、姉妹は別々の学び舎に入学していた。
それはまるで、エリザベートとローズ姉妹と同じように思えた。

教会を訪れた翌週に、エリザベートは十六歳の誕生日を迎えた。
春の盛りの庭園は、一斉に開花した花々が見事な眺めとなっていた。
生まれたことをデマーリオが祝ってくれる。春は、エリザベートが一年で最も好きな季節である。
母が亡くなってからは、誕生日の祝いは離れの邸で開かれていた。
料理長が趣向を凝らした祝いの晩餐を、父とエリザベートの二人で囲む。
祝いの日だからと、エリザベートが本邸に招かれることも、義家族が離れの邸を訪れることもない。エリザベートはそれでも構わなかった。